福江島・田ノ江窯跡発掘調査概要報告(2019)

著者	野上 建紀, 渡辺 芳郎, 中野 雄二, 溝上 隼弘, グェン ティ ラン アイン
著者別表示	Nogami Takenori, Watanabe Yoshiro, Nakano Yuji, Mizokami Akihiro, Nguyen Thi Lan Anh
雑誌名	金沢大学考古学紀要
号	41
ページ	41-58
発行年	2020-02-28
URL	http://doi.org/10.24517/00057296

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

金沢大学考古学紀要 41　2020,　41-58.

福江島・田ノ江窯跡発掘調査概要報告（2019）

野上建紀（長崎大学）・渡辺芳郎（鹿児島大学）
中野雄二（波佐見町教育委員会）・溝上隼弘（佐世保市教育委員会）
グェン ティ ラン アイン（ハノイ大学）

はじめに

近世五島焼は、江戸時代に長崎県五島列島（図１）で焼かれた陶磁器である。五島列島は旧肥前国に属するため、肥前陶磁の一つと言っても差し支えないとは思うが、窯跡が残る福江島は肥前本土部と離れた離島であり、性格的には肥前以外の地方窯に近いものがある。

肥前の近海で磁器を焼いた島は他にもある。対馬、平戸、天草、そして、能古島などである。成立時期や背景はそれぞれ異なっているが、成立要因の一つは磁器原料の存在である。地方窯はとりわけ自領に磁器原料を産する地域が早くから磁器生産に取り組んでおり、対馬、天草、そして、五島もまた磁器原料を産する島であった。また、対馬や天草の場合、その地理的位置から海外貿易が窯場成立の要因の一つとなっているが、五島の場合は、江戸後期の多くの地方窯がそうであるように全くの国内向けであり、これまで海外向けの製品は確認されていない。すなわち、近世後期になり、波佐見の「くらわんか」碗・皿の普及により磁器使用の一般化が進んだ結果、自領で磁器を生産し、他領からの磁器の流入を抑え、さらには他領への販売を目論んだ窯の一つである。

国内における磁器使用の一般化と地方窯における磁器生産の関わりを知る上でも五島焼の研究は重要であると思う。

１．調査に至る経緯

2016 年度より長崎大学多文化社会学部（野上研究室）は、近世五島焼の調査・研究を行ってきた。現地踏査､測量や発掘調査を主とした考古学的調査である。近世五島焼についてはこれまで発掘調査はもちろん考古学的な研究自体がほとんど行われていない。遺跡の位置や範囲も曖昧なものが多く、基礎資料の収集が必要である。現在、福江島で５～６ヶ所の窯場の存在が推定されており（図２）、その中で窯体が確認されている窯跡は田ノ江窯跡、八本木窯跡の２ヶ所のみである（図３～５）。その他、採集資料等によって存在が確認されている窯跡（山内窯跡）が１ヶ所ある。

予備調査を経た後、2016 年度は田ノ江窯跡の測量調査（野上 2017）、富江町所在の窯跡（田ノ江窯跡、八本木窯跡）の採集資料調査（野上 2018）、2017 年度は八本木窯跡の測量調査（野上 2018）、福江島所在の窯跡の踏査、山内窯跡の採集資料調査（野上 2018）、2018 年度は田ノ江窯跡の発掘調査、関連窯業地（讃岐地方、天草地方）の調査を行った。2018 年度の発掘調査は、窯体の範囲と焼成室の構造を確認するために行ったものである（野上他 2019）。そして、2019 年度も 2018 年度に引き続き、田ノ江窯跡の発掘調査を行なった。

本報告は、2019 年度に行なった田ノ江窯跡の発掘調査と 2018 年度に行なった関連窯業地（讃岐地方、天草地方）の調査の報告である。

２．調査の目的、手続きおよび期間

2018 年度に引き続き、田ノ江窯の窯体の範囲確認を主な目的とし、その過程で出土した製品から窯の操業年代を推定することも目的の一つとした。

土地所有者の承諾を受け、2019 年 5 月 21 日付けで埋蔵文化財発掘調査の届出を行い、同年 6 月 19 日付けで長崎県教育委員会教育長より通知文を受領した。現地調査期間は、2019 年 9 月 13 日～ 18 日であり、同年 9 月 24 日付けで埋蔵物発見届を五島警察署長宛てに、埋蔵文化財保管証を長崎県教育委員会教育長宛てに提出した。

なお、埋蔵文化財関連の手続きでは、本報告で使用している「田ノ江窯跡」ではなく、遺跡地図に掲載さ

れている行政上の名称である「皿山窯跡」の名称を用いている。本報告で遺跡地図に掲載されている行政上の名称ではなく、田ノ江窯跡の名称を用いているのは、同市内に同じ名称の近世の磁器窯が二つ存在するからである。旧岐宿町と旧富江町の別々の町にそれぞれ存在したものが、2004 年の市町合併によって、合併後の五島市に同名の窯跡が二つ存在することになり、名称による混乱を避けるため、旧岐宿町の皿山窯跡を山内窯跡、旧富江町の皿山窯跡を田ノ江窯跡とよぶことにしている。

３．調査組織

今回の調査組織は下記のとおりである。

（１）調査主体・代表者

長崎大学多文化社会学部（野上研究室）・野上建紀（長崎大学多文化社会学部・教授）

（２）調査員

野上建紀（長崎大学多文化社会学部・教授）
中野雄二（波佐見町教育委員会・学芸員）
溝上隼弘（佐世保市教育委員会・学芸員）
グェン ティ ラン アィン（ハノイ大学日本語学部文化文明学科・学科長）

（３）調査指導

渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部・教授）

（４）発掘調査補助

植野律子（長崎大学多文化社会学部共生文化コース４年）
賈文夢（同学部研究生）
秋月冬楓、石井勝吾、林理一朗、村山由貴、仲宗根理希、三根茉佑子、山浦咲良、與儀日呂扇（以上、同学部社会動態コース３年）
古川勇魚、廣瀬友葵（同学部社会動態コース２年）
沖真優子（同学部オランダ特別コース３年）
関本航明（同コース２年）

（５）出土遺物整理作業

植野律子（長崎大学多文化社会学部共生文化コース４年）
賈文夢（同学部研究生）
石松佐織（同学部社会動態コース４年）
三根茉佑子、堀とまほ（同学部社会動態コース３年）
沖真優子（同学部オランダ特別コース３年）
古川勇魚、友岡梓（以上、同学部社会動態コース２年）

（６）調査協力

五島市教育委員会、出口健太郎さん、小田昌弘さん、五島市富江支所、山﨑健さん、五島市シルバー人材センター、相良俊則さん、貞方義男･清子さん、民宿としまる、御食事処一平

４．調査方法

2018 年度と同様、トレンチ調査法を採用した。2018 年度には胴木間確認のために A トレンチ（AT）と A1 トレンチ（A1T）、焼成室の構造確認のために B トレンチ（BT）、窯尻確認のために C トレンチ（CT）を設定し、調査を行った。今回は窯尻確認のために D トレンチ（DT）および F トレンチ（FT）、そして、胴木間確認のために E トレンチ（ET）を設定した（図６・８）。

５．出土遺構

D トレンチ、E トレンチ、F トレンチの各トレンチで検出された遺構等の説明を行う。

（１）D トレンチ（DT）

窯尻の確認のために窯上方の崖下部に設定したトレンチである（図６、写真５・７）。13 ～ 36cm の表土の下から地山とみられる黄色土が検出されたのみであり（写真８）、表土の中にも焼土等は含まれていない。

（２）E トレンチ（ET）

胴木間の位置の確認のために窯の下方に設定したトレンチである（図８・９、写真９～ 12）。表土の下は、焼土を含む暗褐色土層（2 層）があり、その下が焼土や窯壁片、製品の失敗品や窯道具を多く含む赤褐色土層（3 層）である。今回の調査で最も多く遺物が出土している土層である。そして、焼土を含む暗褐色土層（4 層）を挟んで、その下に地山の土によく似た黄白色粘土層（5 層）が広がっている（写真 13）。黄色土と白

色の岩屑からなる土層であり、整地層とみられる。

５層の下から窯体の一部が検出されている（写真14・15）。一般の焼成室とは異なる構造をしており、胴木間あるいは胴木間に非常に近い位置の遺構ではないかと考えられる。床境によく似た遺構（床境状遺構）が検出されている。通常の床境であれば、この遺構を挟んで、砂床と火床が存在することになるが、砂床に該当する部分に砂は存在せず、炭が堆積していた（ET土層断面図 No.6 層）。火床に該当する部分に「床」がわずかに残るが、その「床」に対応する土層（ET 土層断面図 No.11 層上面あるいは No.13 層上面）をみると、通常の焼成室であればみられる下室との間の温座の巣の立ち上がりを確認することができない。床面は窯の下方に向かって緩やかに傾斜しており、そのまま焚き口につながる可能性もある。

また、火床に該当する部分にわずかに残る「床」の直下に「壁」が検出されている。「壁」は十分な被熱がみられないため、胴木間内部の段差である可能性が考えられるが、床との切り合い関係が明確ではない。ET 土層断面図 No.11 層上面や No.13 層上面が、火床に該当する部分にわずかに残る「床」の続きであることが確かであれば、明らかに「壁」は「床」に切られていることになる。いずれにしても一般の焼成室とは異なる構造であり、前に述べたように胴木間あるいは胴木間に非常に近い位置の遺構と考えられる。

（３）F トレンチ（FT）

D トレンチと同様に窯尻の確認のために設定したトレンチである（図６・７、写真６）。D トレンチの下方（東側）、2018 年度に調査を行なった C トレンチに近接した位置に設定したものである。C トレンチで検出されている焼成室の奥壁に続く壁と床面がトレンチの東側で検出され（写真 17）、その奥壁の背後に排水溝とみられる溝状遺構が検出されている（写真 18・19）。

検出された焼成室の床面には窯道具の一種であるハマが残されており、床面に続く奥壁は高さ 34cm 程度残っている。溝状遺構の幅は 120cm、深さは約 56cm である。窯尻とみて問題ないと考える。

一方、F トレンチの北側（谷側）の崖下に製品や窯道具（写真 37・38）が散布している箇所があり、物原の一部である可能性がある。焼成室の出入り口の位置を考えると、窯体がさらに上方まで存在していた可能性を示唆するが、完全に削平されてしまっており、確認する術はない。なお、窯の上方に設置されていることが多い祠などは今回も確認されていない。

６．出土遺物

E トレンチ、F トレンチより、窯壁片、製品、窯道具が出土している（写真 23 ～ 36）。その内、全ての出土製品と一部の窯道具を長崎大学に持ち帰り、整理作業を行なっている。窯壁片と一部の窯道具は出土したトレンチに埋め戻している。

（１）製品

製品はほぼ全て磁器である。確認したかぎり、陶器は含まない。焼き歪んだものや熔着したものが多く見られる。焼き歪みの激しいものも少なくなく、素焼きを行わずに焼成したものも含まれているとみられるが、いわゆる雨漏り痕があるものはまだ確認されていない。

器種は、碗と皿が大半を占める。碗は広東形碗と端反碗が主体である。皿は蛇の目凹形高台の小皿が多い。ほとんどが染付である。

製品や窯道具などの遺物が最も多く出土した箇所は、ET ３層である。当該箇所の窯体を埋めて、黄白色粘土や白色岩屑（ET 土層断面図 No.5 層および No.7 層）で整地した上に堆積している土層（ET 土層断面図 No.3 層）である。窯壁片も多く含まれるので、窯の廃棄後に物原に堆積した製品の失敗品や窯道具とともに二次的に埋められたものであろう。

ET ５層からは、焼成不良の製品が多く出土している。呉須によって絵付けしたものが一部見られるので、素焼き焼成の過程ではなく、絵付け後の本焼き焼成の過程で失敗した製品であることがわかる。しかしながら、素焼きをした後の焼成不良であるのか、それとも焼成不良によって素焼き状になったか、判別は難しい。いずれにせよ胴木間に近い焼成室では温度が安定的に上昇せずに焼き損じもまた多く、そのための焼成不良による結果であろう。

（２）窯道具

窯道具はトチン、ハマ、オオヌケなどがあり、ハマは円形ハマ、逆台形ハマ、足付きハマ、四つ羽根ハマなどがある。ボシ（サヤ）は見られない。

出土遺構の項でも述べたように、FT で検出された焼成室の床面からハマが多数出土している。2018 年度に調査を行なった CT でも同様の出土状況が確認されている。この焼成室の最後の焼成の際に使用したものとみられるが、窯道具には炭・灰が付着しているので、この焼成室の使用が中止された後も窯の焼成は行われたと推測される。つまり、窯を短縮してから少なくとも 1 回は焼成を行なっている。

７．発掘調査成果

今回の主な調査成果は、胴木間と窯尻の位置をほぼ特定できたことである。胴木間は一般の焼成室とは構造の異なる室の確認、窯尻は焼成室の背後の溝状遺構の確認によってその位置を特定した。その結果、窯の規模（長さ）を推定することが可能となった。詳細な地形測量を行なっていないため、正確な計測値ではないが、推定 70 メートル超の登り窯であることが明らかになった。

出土した製品や窯道具は、昨年度の内容と大きく変わるところはなかった。推定される操業期間に変更を与えるものでもなかった。

８. 五島焼の関連窯業地調査

文献資料等に五島焼との関わりが伝えられている窯場は、大村藩の窯場、天草の高浜焼、讃岐地方の窯場などである。大村藩の窯場は波佐見焼か長与焼とみられるが、いずれか断定できない。

2019 年 3 月に肥前以外の窯業地の調査を行った。すなわち、2019 年 3 月 7 ～ 10 日に讃岐地方の調査、3 月 22 ～ 23 日に天草地方の調査を行なった。讃岐地方の調査地は吉金窯跡、平尾窯跡、斎藤窯跡（横井窯跡）、さぬき市歴史民俗資料館であり、大川広域行政組合埋蔵文化財係にて各窯跡の出土遺物の調査を行なった。天草地方の調査地は上田陶石合資会社、上田資料館、高浜焼窯跡などである。上田資料館では高浜焼の伝世品の調査とともに高浜焼窯跡周辺から採集された磁器片の調査を行なった。

（１）天草地方

天草地方は、良質で豊富な磁器原料である天草陶石の産地である。現在の有田焼や波佐見焼など肥前の主要な磁器産地がこの天草陶石を利用している。天草陶石の使用の開始時期については諸説あるが、17 世紀前半にはすでに天草下島の楠浦窯（天草市楠浦町）で磁器生産が行われており、さらに 17 世紀後半には内田皿山窯（苓北町）や下津深江窯（天草市天草町）などでも磁器が生産され、それらには海外市場向けの製品も含まれている。そのため、17 世紀前半にはすでに天草陶石の使用が始まっていた可能性が高い。その後も断続的に窯業が営まれ、18 世紀後半には現在まで続く高浜焼が始まっている（写真 39・40）。

そして、文化２年（1805）に富江領の五島運龍が天草の高浜村の上田定胤（礼作）らを招聘して焼かせたことが知られている。『富江町郷土誌』には、上田家に残る以下の文献資料の記述をあげている（富江町郷土誌編纂委員会 2004）。

文化二年四月三十日
一、五嶋富江御用人松園多門左衛門様今晩当地江御着船之由

五月二日
一、松園氏御出　礼作五太夫へ　陶山并開発方御頼被成度為　工人壱人画工両人荒獅子（荒使子の意か）両人遣呉候様御頼

閏八月九日
一、礼作駿平五太夫　并細工人崎蔵　絵書兼四郎種蔵荒獅子平蔵九郎七政倅万次　五嶋行源吉舟より

史料によれば、文化 2 年（1805）4 月 30 日に五島藩富江領の御用人である松園多門左衛門が天草の高浜を訪れ、5 月 2 日に上田礼作・五太夫に陶山開発を依頼している。そして、閏 8 月 9 日には、上田礼作・駿平・五太夫が細工人、絵書、荒使子らとともに五島に出向いている。高浜焼から導入された技術が窯業技術全般にわたっていることが推察される。

そして、従来、田ノ江窯が上田礼作らが関わった窯と考えられていたが、近年の文献資料の調査や発掘調査等により、八本木窯が該当することが明らかになっている。

文化四年八月十二日
一、礼作五嶋行出帆　家内不残乗船

八月廿八日
一、礼作共廿一日富江江着
同所江一宿
繁宿村江引越候由

文化 4 年（1807）8 月 12 日に五島に向けて出帆し、富江を経た後、繁宿（繁敷か）に引越していることがわかる。そして、礼作が引越した先は、文化 7 年頃の繁宿の古絵図に「禮作」と記された家屋として描かれており、同図には「窯」、「スヤキ（素焼き）」、「役所」などから構成される八本木窯の「皿山」が描かれている。「役所」が設けられていることから藩の関与がうかがえる。また素焼き窯が描かれていることから、主たる工房である細工場も付近にあったものとみられる。文化 7 年（1810）2 月 20 日の日記にも「皿山」の文字が見られることから、1810 年頃に操業していたことは確かである。

こうして高浜焼の上田礼作らを招聘して開窯した八本木窯であったが、長くは続かなかったようである。「五島富江繁敷村　文化九年七月より　五島富江陶山休方並福蔵中岳へ引越に付」とあり、文化 9 年（1812）には休止しているようである。さらに文化 11 年（1814）には五太夫ら一行も天草へ帰っている。

そのため、高浜焼と関わりのあった年代は、1805 ～ 1814 年となる。この時期に該当すると見られる製品には、望料形碗、筒形碗、広東形碗（蓋）などである（図 10）。いずれも当該期に流行した器形であるため、とりわけ五島焼と高浜焼の関わりを示すものではないが、上田礼作らを招聘した際に高浜焼が操業していたことは確かなようである。強いて共通点を挙げれば、八本木窯では、八と本の文字を組み合わせて意匠化した独自の「八本」銘を入れた製品が焼かれており、高浜焼で見られる天草の文字を意匠化した銘と相通ずるものがある。もっとも生産窯の名前を銘として入れる例は同時代の地方窯でいくつかみられるものであるため、高浜焼と八本木窯に限った事例ではない。

（２）讃岐地方

『五島編年史』には、田ノ江窯について、「コノ皿山ハ富江五島家ノ経営ニシテ皿山奉行ヲ置キ瑞雲寺前ノ貞方氏ヲ以テ之ニ当ラシム」と記されている。また、田ノ江窯に隣接する宝性院が所蔵する「田ノ江村徳松」銘の大皿を紹介し、宝性院の過去帳の記載から、徳松について「清作ノ子ニシテ、清作ハ四国讃岐ヨリ来ルト伝承シ、相良姓ナリ。」と記し、後記のような系図を示している。宝性院横の墓地に残る墓にも同様に刻まれている。因みに現在の土地所有者の一人の先祖にあたる人々である。

清作（嘉永 4 年 7 月 17 日没　清山常楽信士）
徳松（文久 2 年 6 月 4 日没　鑵道玄心信士）
常吉
房吉（姓相良ヲ称ス。明治 10 年 12 月 26 日没　仙翁冬禅信士）

讃岐とあるだけで、具体的な窯場は記されていないが、当時、讃岐地方で磁器を生産していた窯場は、富田焼の窯である。讃岐地方における磁器の創始は天明元年（1781）、さぬき市大川町富田の吉金に開窯した赤松松山によるものとされている。赤松松山（伊助）は平賀源内の弟子であり、祖父弥右衛門の時から、志度で製陶を営んでいたが、天明元年の火災によって家屋敷が全焼したため、富田に移転してきた。寛政 11 年（1799）銘土管と同種の土管に磁器片が熔着したものもあり、また赤松家の記録に「寛政辰年筑前賀治郡末村権平孫権助を雇」とある。末村は筑前の肥前系の磁器窯である須恵焼があった須恵村とみられる。

田ノ江窯との関わりが考えられる 19 世紀前半の富田焼の製品をみてみる。磁器が出土あるいは採集されている窯は、吉金窯、平尾窯などである。森下友子は、富田焼の吉金窯の出土遺物について陶器と磁器の両方があり、碗・皿などの日常雑器ばかりであり、磁器は 18 世紀第 4 四半期から 19 世紀前半の肥前の製品に非常に類似しているとする（森下 2008）。日常雑器が多い点は田ノ江窯と同様である。碗や皿の型式も同時代の肥前磁器と大きく変わるところはない。すなわち、碗は丸碗、朝顔形碗、望料形碗、筒形碗、小広東形碗、広東形碗、端反碗など、皿は蛇の目凹形高台皿が多い（図 11）。一方、窯道具は肥前の磁器窯にはみられないものも多く存在する。森下は肥前・信楽・瀬戸で使用されている窯道具が用いられていることを指摘する。確かに肥前系の逆台形ハマ、トチン、ヌケ、羽根ハマが見られる一方、関西系と見られる重ね詰み用のサヤ、足付き輪状トチミなども見られる。森下は

各地の窯道具や使用方法を混ぜ合わせて窯詰めしており、使用方法まで忠実に模倣していなかったことがうかがえるとしているが（森下 2008）、最初から模倣しなかったというよりはむしろ技術導入当初は使用方法まで含めて導入したが、やがて転用や代用が行われるようになったのではないかと考える。

窯道具と密接な関わりがある窯構造についてみてみると、吉金窯は地表に露出している焼成室の窯壁を観察する限り、肥前系の窯である（写真 41）。その一方、胴木間の平面プランは関西系の形態を持つ。窯には補修痕も見られ、窯規模を縮小して新たに胴木間を築いて当初の形を変えた可能性が高い。おそらく磁器の焼成を目的に肥前系の窯構造と窯道具を導入したが、やがて関西系の技術と融合して改良が加えられ、その結果、窯構造が変化し、窯道具の転用も行われるようになったと考えられる。

平尾窯でも磁器の出土が見られるが、その量は陶器に比べて非常に少ない。比率で言えば、1%未満であり、基本的に陶器生産を行なった窯である。発掘調査時の写真を観察すると、焼成室の構造から関西系の窯であることがわかる（写真 42）。やはり当初、陶器は関西系、磁器は肥前系の技術をそれぞれ導入し、やがて技術系統の区分が曖昧になったのではないかと推測される。

田ノ江窯跡では関西系の窯道具は出土していないし、肥前系と関西系の技術が融合したような痕跡もみられない。全て肥前系の技術と言ってよい。讃岐から陶工を招いたとしても天草の上田礼作らの招聘と異なり、総体的な技術の導入ではなく、成形や装飾など特定の技術に限ったものであった可能性が高い。つまり、讃岐から伝えられた技術は「細工」の技術が主ではなかったかと考えられる。

おわりに

最後に今後の課題をあげておこう。近世五島焼の考古学的研究は始まったばかりであり、多くの課題を残している。まず各窯跡の基礎的資料の収集である。窯の遺構（窯体）と遺物がともに確認されているのは、八本木窯跡と田ノ江窯跡の２ヶ所に過ぎない。田ノ江窯跡については、今回の調査で窯体の範囲を把握することができたが、八本木窯跡については窯尻の位置が推定されているだけで、窯体の範囲については明らかにされていない。遺物についても一部採集資料が確認されているだけである。その他、山内窯跡についてはおおよその窯跡の位置と採集遺物が確認されているが、それ以外の窯跡については詳細が明らかではない。すでに破壊され、消滅してしまっていることも考えられるが、現状の把握を急がねばならない。とりわけ五島焼の最初の窯場と伝わっている小田窯の基礎資料の収集は五島焼の発祥や技術系譜を考える上で重要である。

今回、肥前以外の関連窯業地の調査を行なったが、五島焼に最も大きな影響を与えた窯場の一つが大村藩領の窯業地である。富江領の窯場の成立を支えた天草の高浜焼の技術もその源流は、大村藩領の長与焼にある。五島焼は大村藩領の窯業技術を直接的あるいは間接的に導入して成立している。そして、大村藩領の主要な磁器窯は、全国市場を相手にした波佐見焼と長崎に近い長与焼の窯場である。地方窯への技術伝播については長与焼の役割の大きさを考えているが、五島焼について具体的に検証したことはない。長与焼自身、波佐見焼の技術を母体としているため、波佐見焼と比較して長与焼の特質を抽出することは難しいが、五島焼の源流を知る上で、波佐見焼や長与焼との比較研究は必要な作業である。

次に五島焼の流通の問題もほとんど明らかにされていない。流通に関する文献資料もほとんどなく、消費地の発掘資料による流通圏の把握から始めなければならないが、富江領内はもちろん福江島全体においても発掘事例は少ない。まずは富江領内で田ノ江窯や八本木窯の製品を使用したと考えられる富江陣屋の発掘調査を行い、その位置付けの一つを知りたいと思う。

そして、本研究は、2017 年度より行っている科学研究費基盤研究（B）「陶磁器流通からみるグローバル化の世界史−日本・アジア・中南米をフィールドに−」をテーマに行なっている日本、アジア（東南アジア・西アジア）、アフリカ、アメリカにおける近世の陶磁器流通および消費のグローバル化の比較研究の一環である。五島焼の生産・流通・消費のそれぞれのステージを明らかにし、磁器需要が特別に大きいと思えない島嶼部において巨大な窯を築いて磁器を生産する意義を明らかにしていきたいと考えている。

謝辞

今回の調査では、多くの方々や機関にお世話になりました。芳名を記させていただき、謝意といたしたいと思います。

五島市教育委員会、出口健太郎さん、小田昌弘さん、五島市富江支所、山﨑健さん、五島市シルバー人材センター、相良俊則さん、貞方義男・清子さん、民宿としまる、御食事処一平、さぬき市教育委員会、山本一伸さん、松田朝由さん、上田陶石合資会社、岩下邦明さん（順不同）

本研究は、JSPS 科研費 JP17H02375 の助成を受けたものです。

引用文献・参考文献

富江町郷土誌編纂委員会 2004『富江町郷土誌』富江町教育委員会

野上建紀 2017「五島列島福江島の田ノ江窯跡に関する測量調査ノート」『金沢大学考古学紀要』38 号、47-58 頁

野上建紀 2018「五島焼の窯跡と製品について－2016・2017 年度の調査から－」『金沢大学考古学紀要』39 号、13-35 頁

野上建紀・大橋康二・渡辺芳郎・中野雄二・溝上隼弘・グェンティ ラン アィン 2019「福江島・田ノ江窯跡発掘調査概要報告（2019）」『金沢大学考古学紀要』40 号、55-76 頁

森下友子 2008「理兵衛焼・富田焼」『四国・淡路陶磁器－砥部焼・屋島焼の生産と流通－』161-194 頁

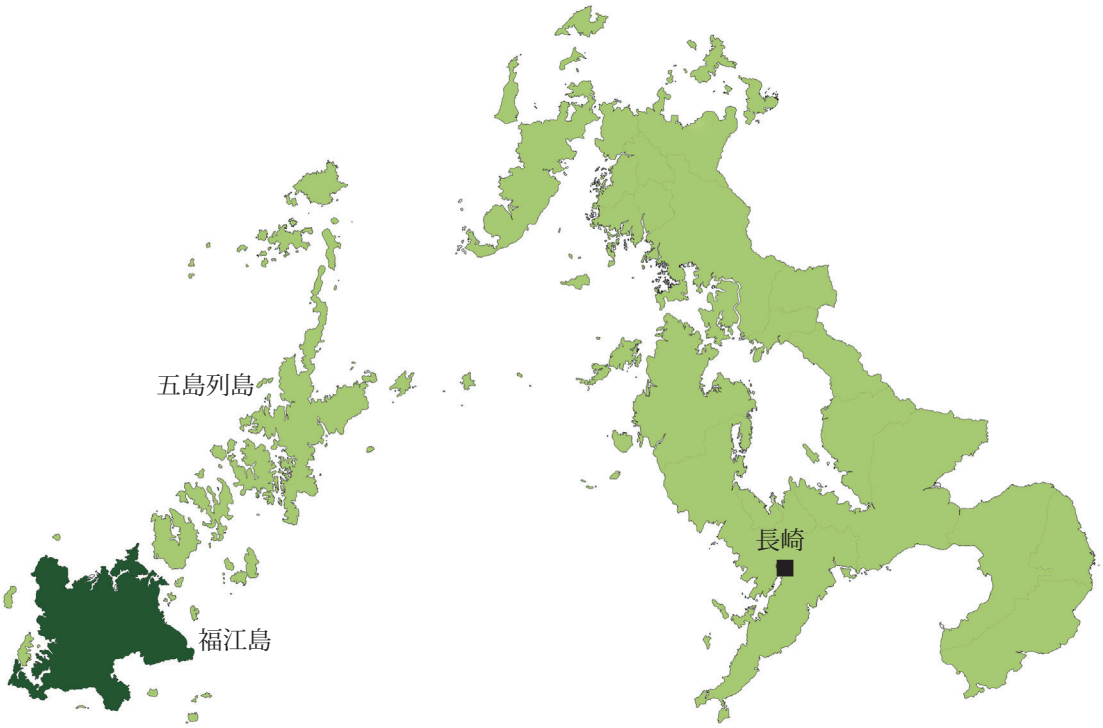

図１　福江島位置図（野上 2017）

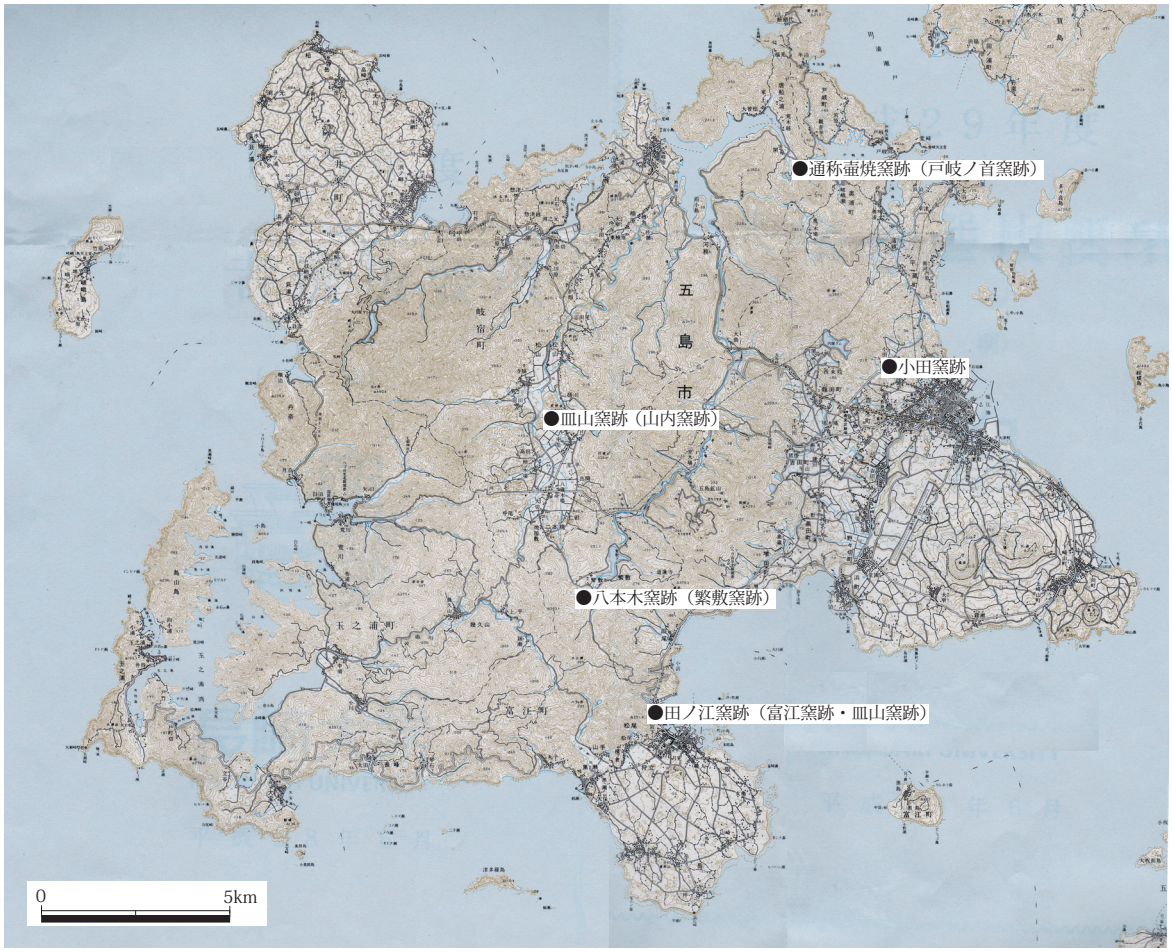

図２　福江島古窯跡分布図（野上 2017 を修正）

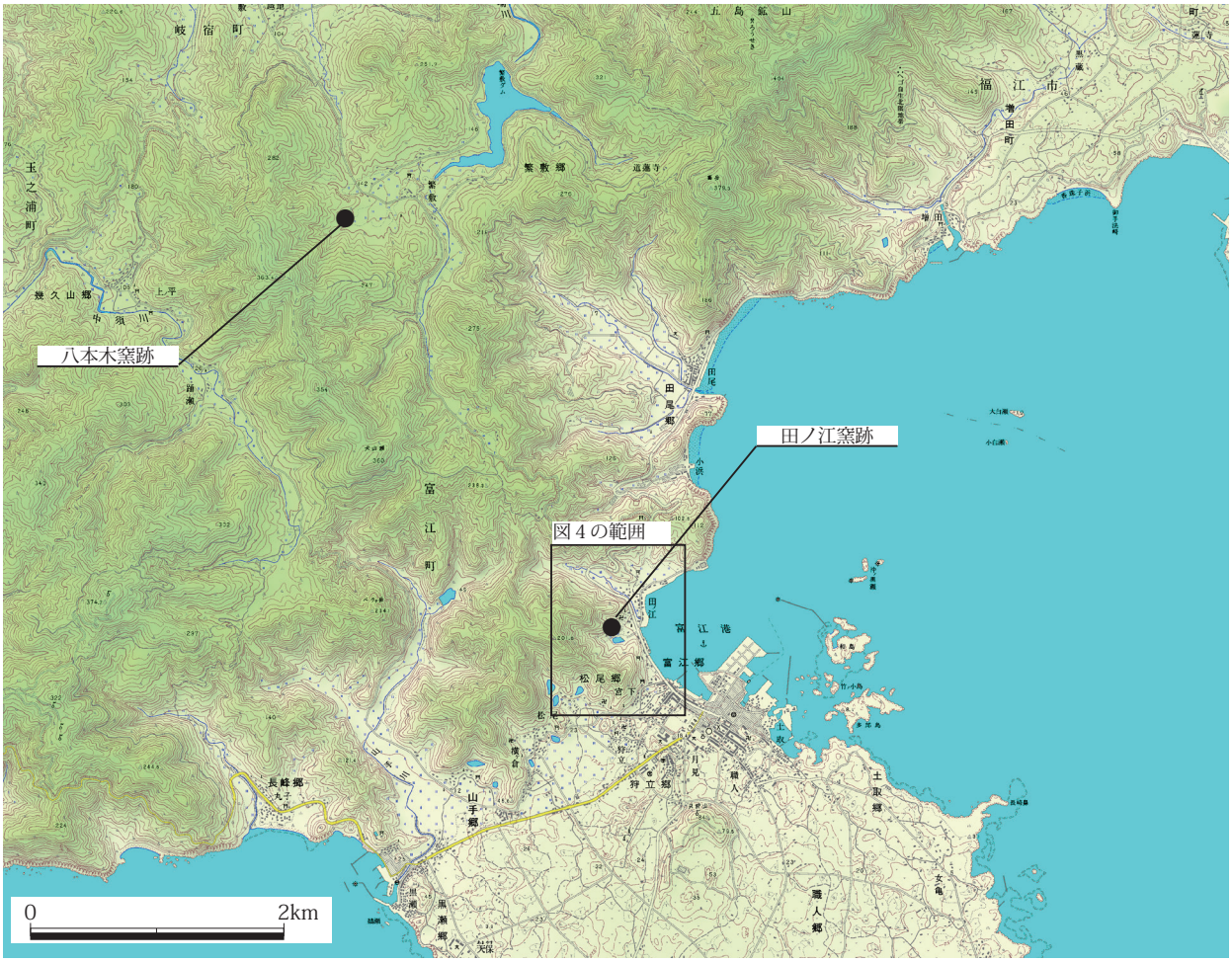

図３　田ノ江窯跡・八本木窯跡位置図（野上 2017）

図４　田ノ江窯跡周辺図

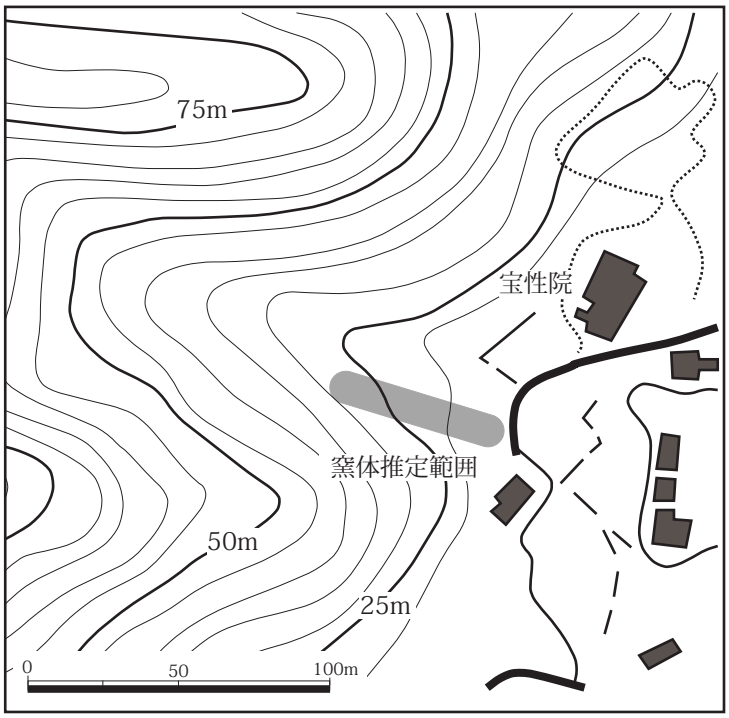

図５　田ノ江窯跡窯体推定範囲（野上他 2019）

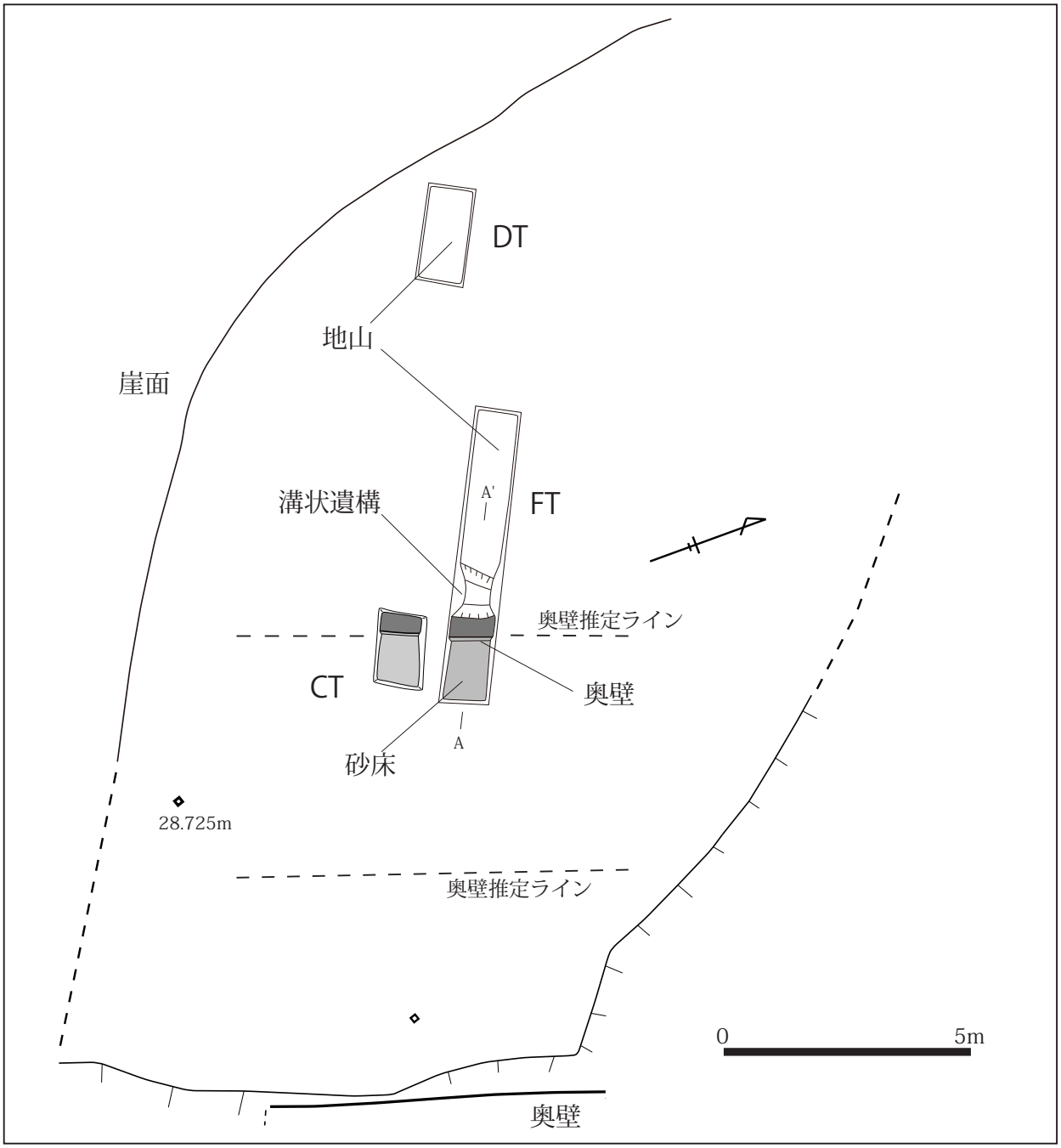

図６　CT（2018 年度調査）、DT、FT 配置図

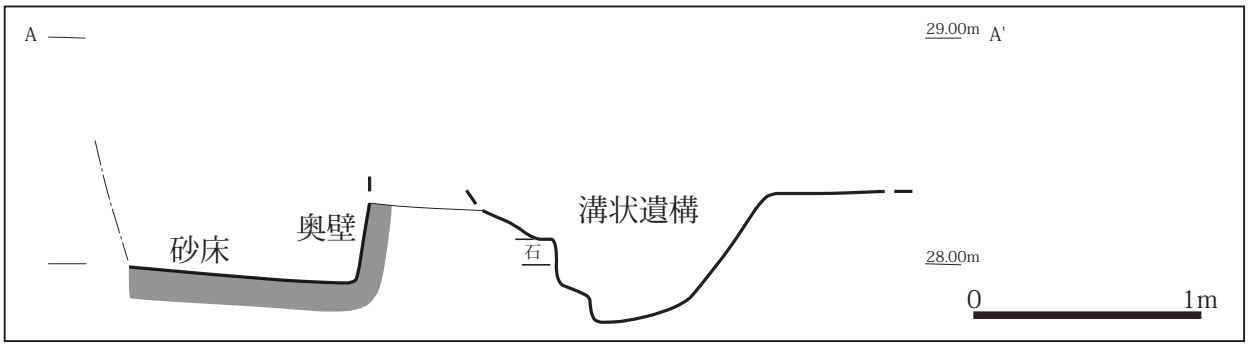

図７　FT 東半部横断図（南面）

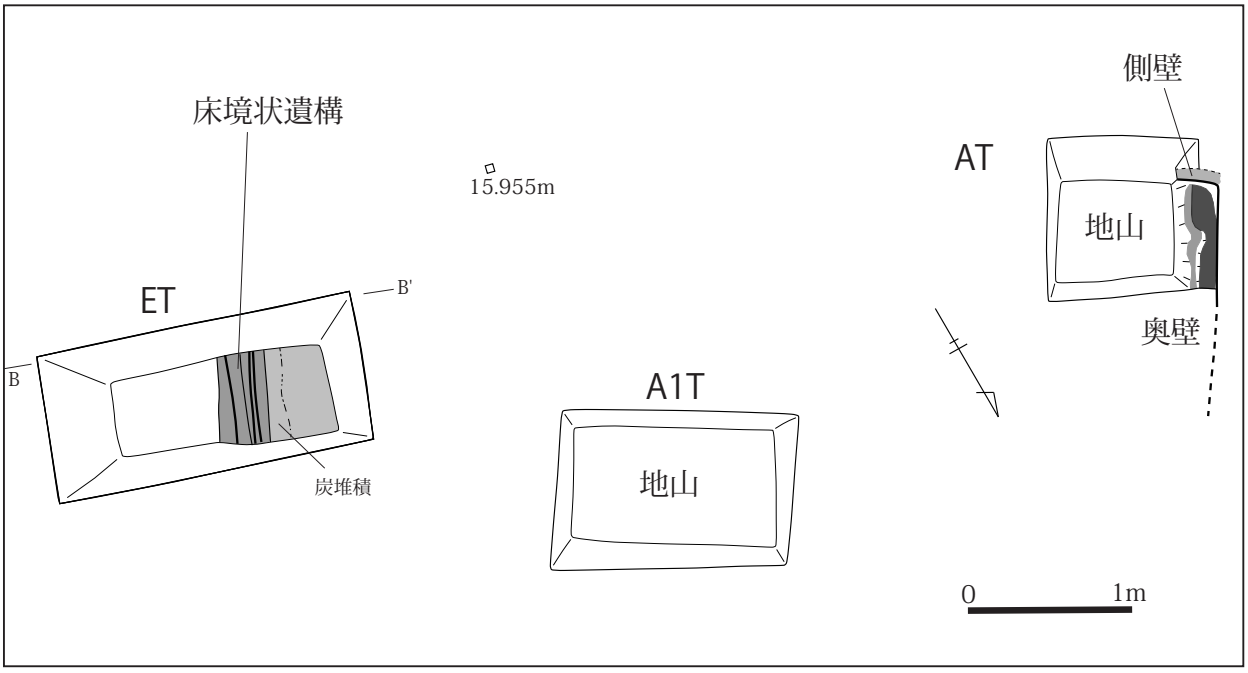

図８　AT・A1T（2018 年度調査）、ET 配置図

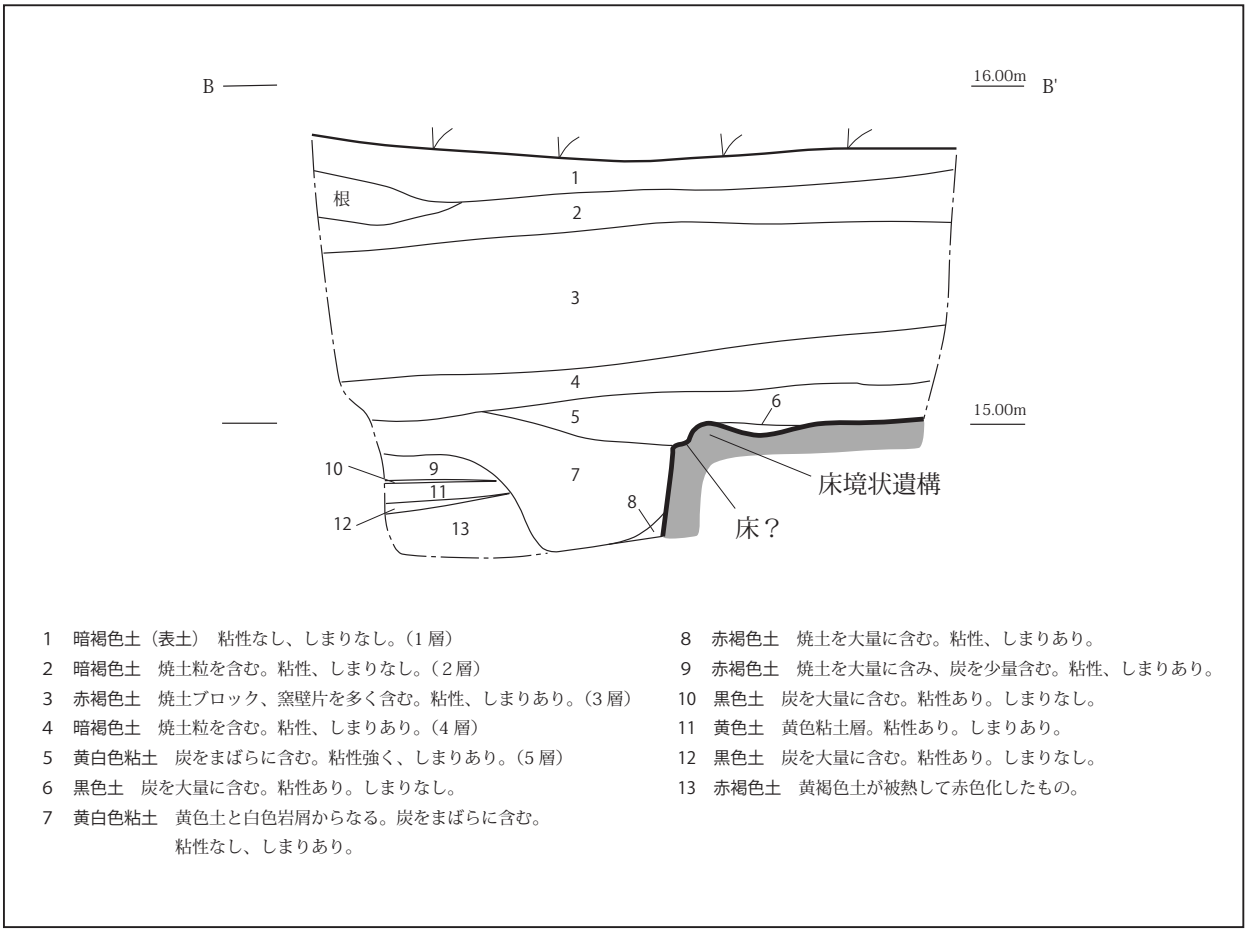

図９　ET 土層断面図（南面）

写真１　田ノ江窯跡近景（東から）

写真２　田ノ江窯跡調査前安全祈願

写真３　DT・FT 付近調査前

写真４　DT 付近調査前

写真５　DT 調査前（東から）

写真６　FT 調査前（手前は CT）

写真７　DT・FT 発掘風景

写真８　DT 検出地山（南西から）

写真 9　ET 調査前（西から）

写真 10　ET 発掘風景

写真 11　ET 発掘・遺物採集風景

写真 12　ET 発掘・遺物採集風景

写真 13　ET 検出 5 層上面（南から）

写真 14　ET 検出窯体（北から）

写真 15　ET 検出窯体（西から）

写真 16　FT 発掘風景

写真 17　FT 検出床面の状況（東から）

写真 19　FT 検出溝状遺構（北から）

写真 21　田ノ江窯跡測量風景

写真 18　FT 検出窯体と溝状遺構（東から）

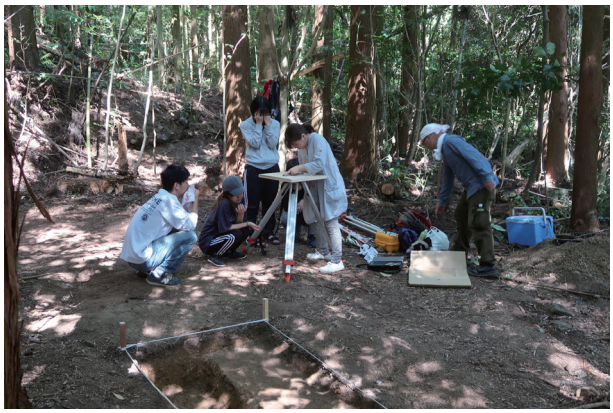
写真 20　田ノ江窯跡測量風景

写真 22　発掘調査参加者

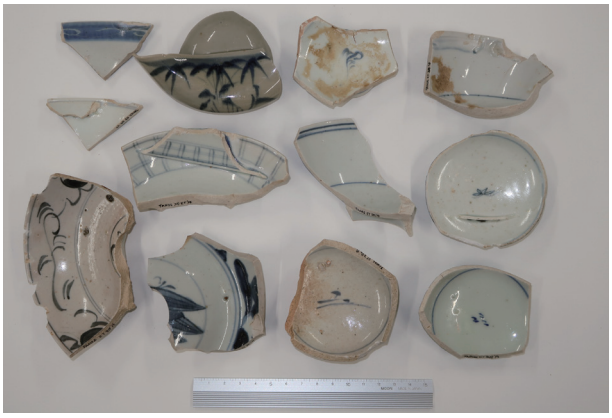
写真 23　ET ３層出土製品

写真 24　ET ３層出土製品

写真 25　ET ３層出土製品・窯道具

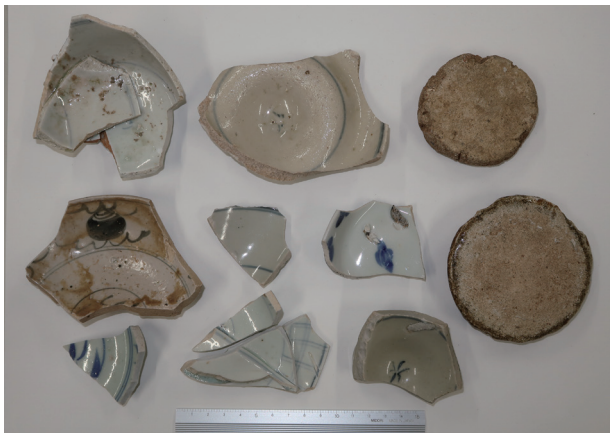
写真 26　ET ３層出土製品・窯道具

写真 27　ET ３層出土製品

写真 28　ET ３層出土製品

写真 29　ET ３層出土窯道具

写真 30　ET ３層出土窯道具

写真 31　ET ３層出土窯道具

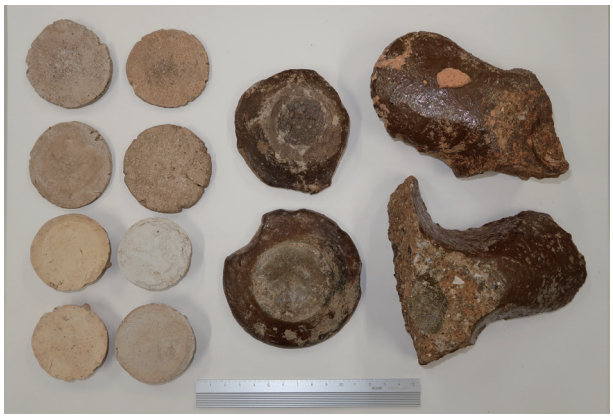
写真 32　ET ３層出土窯道具

写真 33　ET ４層出土製品・窯道具

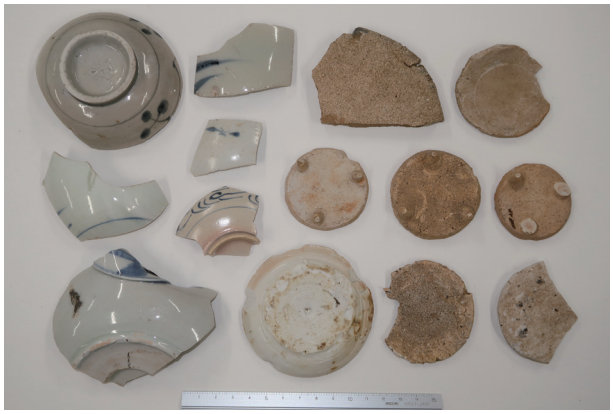
写真 34　ET ４層出土製品・窯道具

写真 35　ET ５層出土遺物

写真 36　FT 砂床直上出土窯道具

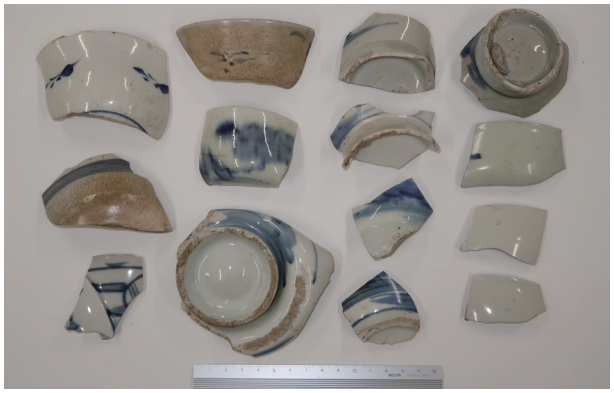
写真 37　FT 北側の斜面下採集製品

写真 38　FT 北側の斜面下採集製品

写真 39　高浜焼 A 窯跡（熊本県史跡）

写真 40　高浜焼 B 窯跡

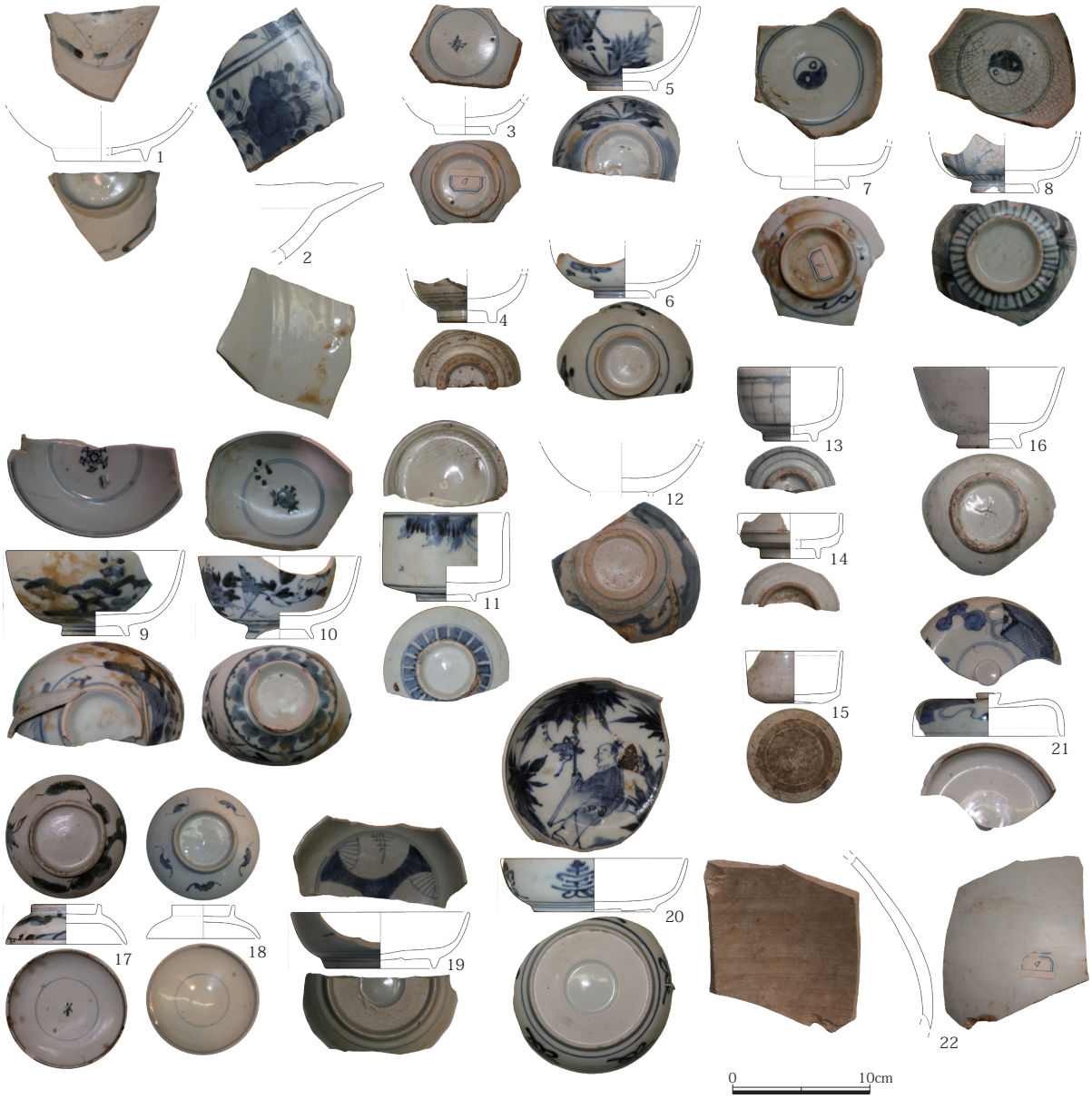

図 10　高浜焼窯跡採集遺物

写真 41　吉金窯跡現況

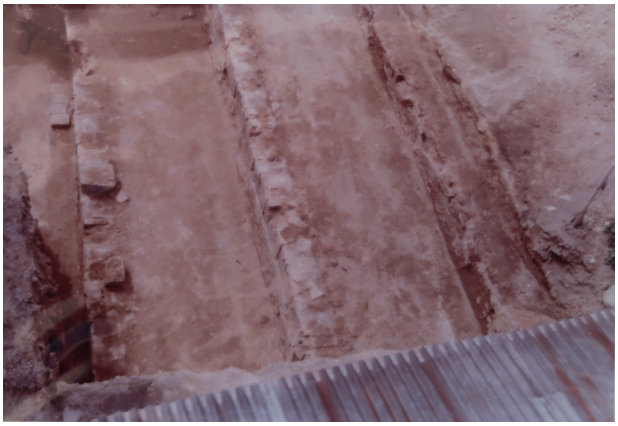

写真 42　平尾窯跡検出窯体

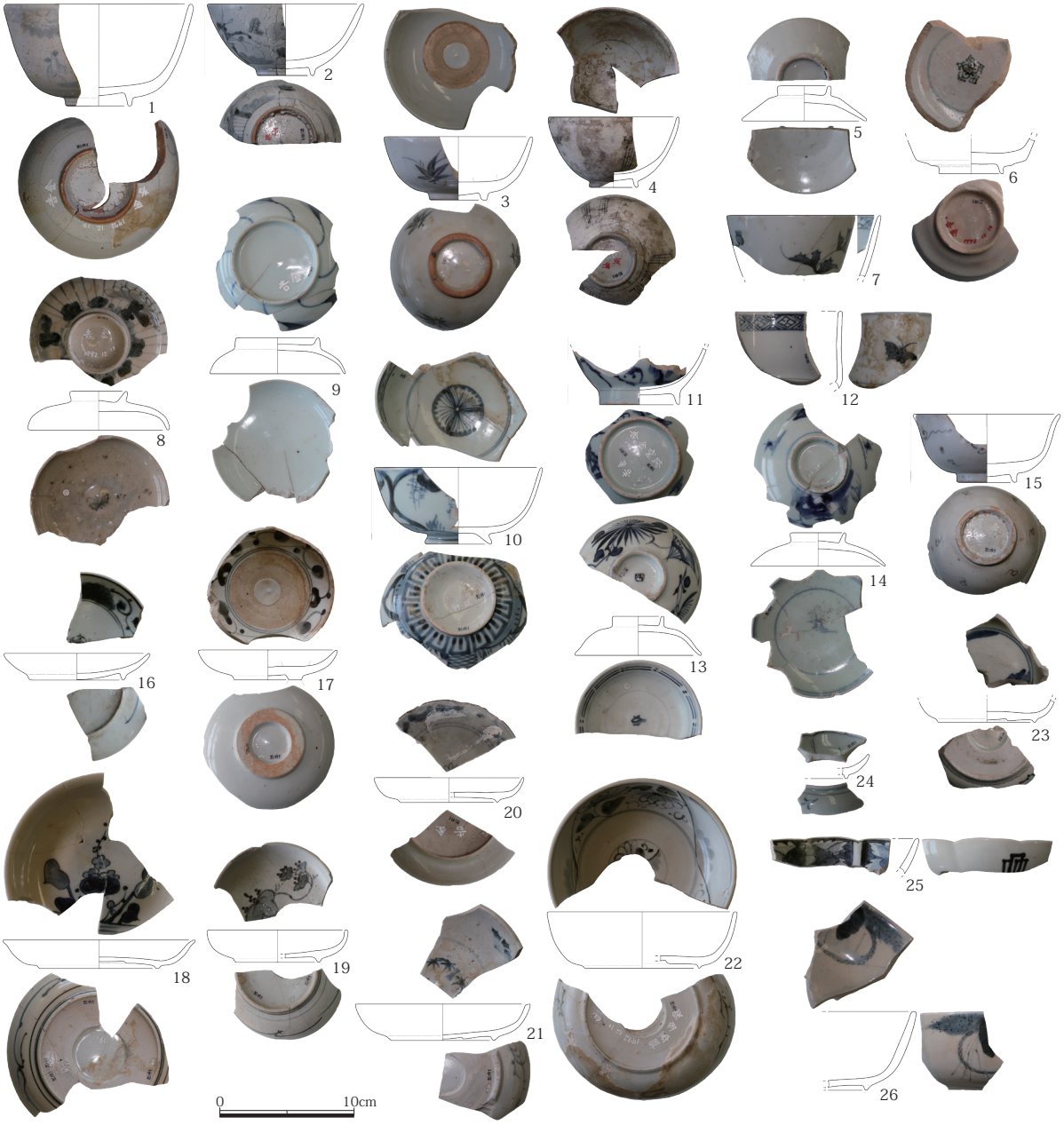

図 11　吉金窯跡採集遺物